



Treasure of the life

たとえそこが
熱狂の渦だとしても
真実は存在しない 決して

* * *

人の多さが
正しさの証だなんて
笑わせないでよ

嘘ですべての人を
騙（だま）し通せたとしても
私だけは騙せない

* * *

ハリボテだと知っている僕は
君にとってこの世界で唯一
脅威となる存在だろう

最後にどれだけの人が
残っているでしょうか
最後まで見届けてあげよう

* * *

人の心をまるで知ったかのようなフリして
微塵も知らないでいる その儚さ その盲目で
どれだけ罪を重ねれば気が済むの

痛みと苦しみを生む存在に
もはや存在の価値はない
生命力を失わせるようなやり方に鉄槌を下す

* * *

その笑顔が凍る日が見える
ひざを折る光景と
泣き崩れる様が重なる

言葉の力を信じる
制裁の行方は
この紡ぐ言葉だけが知ってる

* * *

その薄汚れた心は
燃え盛るしかないのか
それとも うずもれるしかないのか

君がいない風景の中走る僕の
見えないはずの胸のうちは
オレンジ色の綺麗な夕日だけが知っている

* * *

時によって癒えるはずの傷は
僕の中ではまだ癒えずに
だからこそ全て抱えてここに立てている

顔を背けたところで
逃げられはしない ならいっそ
すべて飲み干してしまいたい

* * *

消えてしまいたいと思うほど
追いつめられた君だから
本物になれる

差し違える覚悟はあるか
何かを守る戦いとは
理論だけじゃ語れない

* * *

目を伏せて立ち止まる
背中に描く風景には
間違いなく君がいた

こらえきれずに流す涙は
空に還って
大地を潤す

* * *

痛む傷跡グッとおさえる
君の片鱗に
今も苦しめられて

残る記憶 刺さる片鱗
僕がただ一つ
つかなければならぬ嘘

* * *

僕が走り抜けたいと願う理由
それはただ思い出さずに済むようにと
過去という蔓（つる）に足を取られまいと

思い出の美しさは
どうしても「今」に敵わないと
どうやら決まっているようだ

* * *

痛みから立ち上がった
手をついて這い上がった
だからここにいる

自分だけがシラフで
周り全員酔っぱらい
それでも正義を主張するのが勇氣

* * *

そのどろどろとした気持ちも
この割り切れない思いも
ひとつも無駄じゃない

悪を行うことだけが悪じゃない
善を行わないことも悪だ
不善は悪なんだ

* * *

笑ってほしいから
僕から笑いかけるよ
鏡の如くほら君も笑った

自分より弱いものには強くでて
自分より強いものにはペコペコする
それは畜生の心だ

* * *

君が笑えば
世界が歌う
本当だよ

いかさま師への拍手はいつか
刃（やいば）へと変わり
その身を蝕（むしば）んでいく

* * *

花々のささやきが聞こえてきた
そんな場面に出会えるといつも思う
ねえ ぼくも仲間に入れておくれよ

僕には見える

その永久に見える栄えは

血の犠牲の上に成り立っているって

* * *

声なき声が聞こえてきて

ひとりじゃ何もできないと思うのをやめた

あきらめなくていい 心から言えた

その心にもうすぐ虹が架かるだろう
涙多き 雨多き その心だからこそ
さぞ美しい虹が架かることだろう

* * *

眠りに落ちる 疲れた体を横たわらせて
感じる疲労 心地よい
たとえ誰が褒めてくれなくとも

切り裂いて破った
衝動も闇もやりきれない思いも
みんなみんなみんな

* * *

漆黒の闇にゆれる紅（くれない）は
僕にとってたった一つの希望
もう離さない

流れ星が地面にぶつかって
砕け散るような音がした
いつの日かの胸のこの心

* * *

必然だとしか言いようのない出来事に
思わず遭遇したことが
君にだってあるだろう？

またうつむいているのかい？

君が孤独だと泣く日も

君は一人じゃない

* * *

人はいつでも心のどこか奥底で

自分を完全燃焼できる何かを

探し求めているはず

明日を迎えにいける
そんな気になれる理由は
いつもたわいもないこと

* * *

悲しみを忘れることだけが
幸福に向かわしめる
道標とは限らない

君がこうして生きているということは
決して当たり前じゃない
だれが何と言おうとも

* * *

一身の安泰を思うのなら
この星すべての静謐（せいひつ）を
心から祈る それこそが人

僕が持つものはピエロの涙さ
ペイントだから泣いてなんかいないのさ
泣いてなんかいないのさ

* * *

痛いよ、と泣いた声を
僕は確かに聞きとっているから
痛いよと言いたくても言えなくて殺した声を

太陽の眩しさに目を眩（くら）ませたあとは
仲直りのしるしに手を差し出してみよう
そこには 生まれたての小鳥のような優しい温もりが

* * *

語れば語るほど
砂でできた城は壊れて
不格好でも住みやすいレンガの家だけ残る

煌びやかな中を歩くのもいいけど
そのうち気付く
地道が一番と

* * *

誰かの事を思いつづけること
考え続ける事は
決して不可能なんかじゃない真実

小さな事だと思える行動の積み重ねが
大きく実を結ぶ結果を同時に生んでいるから
陰で目立たない君こそが輝いている

* * *

涙を流さないでいてよ
太陽はいつの日だって 例え雲に遮られていたって
こちらからは見えなくても変わらず輝いているじゃない

砂に書いた波にさらわれし夢は
知らずの間に現実となった
夢を描く事自体の素晴らしさはこんなものじゃなくもっとさ

* * *

閉め切ったその心の扉の冷たさごと抱きしめたい
たとえこの体が冷たく凍えてしまっても
その悲しみの涙ごと飲み干してあげる

目を伏せた君の言いたいことは分かってる

「私の人生の何が分かるっていうの？」

その本心を僕はいつも待ってる

* * *

人を信じないと決めたのなら

その閉じた心のまま言葉をぶつけてよ

まだ涙を流せるうちに

苦しい時に苦しいと言えない事は
絶対に弱さなんかじゃない
その人の強さ以外の何ものでもないっていうのに

* * *

笑うことをもう忘れてしまったんだね
どこかに置いてきてしまったんだね
ならば僕と一緒に探しに行こう もう一度

その心の慟哭は毎日聞こえているよ 僕には
心で泣き続けていることも知っている
本当は笑顔なんて見せてないこともね

* * *

どうか涙で頬を濡らさないでいてよ
君の微笑みが僕を救うから
君の心には太陽の大輪が眠っているんだよ

自分はたった一人だと言い切るのもいい
だけど一人きりにならないでいてよ
明日は少し笑顔見せてよ

* * *

どうせ分からないさ、と
ため息混じりに今日もつぶやく
君の声が聞こえた

暴いてみせよう

それがたとえ 茨（いばら）の道への
扉を開く事を意味していても

* * *

言葉にどこか虚空に響くだけの
意味一つなさないものなど
ひとつだって存在はしない

どこかしらから染みていく言葉は
悪をいつまでも
のさばらせる事を許さない

* * *

優しさを持てるのは
少しばかり
痛みを知った君だから

なんにもできやしないと言っても
君には力がある
力があるから君がいる

* * *

この場所でいつまでも君を励まし続けるよ
どこまでも続きそうなトンネルの中にあっても
ここから君を励ます言葉を送り続けるから 負けないで

悪が消えて善が残る
何がどちらかは難しいかもしれない
それでも いつの日もそれが歴史の証明

* * *

未来を悲観させるような奴らと戦う事を
使命と考え誓う
誓いは果たしてこそ誓いになる

笑っている理由（わけ）も
泣いている理由（わけ）も
最近同じように思えてしまうね

* * *

光と影は誰にでもあるものだから
だからこそ光を増やして闇を追いやり
僕らは光の部分を見つめていくべきなんだ

現状をただ嘆くだけでは
何一つ変わりはない
問題は自分が何をするかだ

* * *

血の滲（にじ）むような
努力の先にしか
成長はない

権力者はいつも
民衆の顔色を窺（うかが）い
ビクビクしているだけさ

* * *

強い言葉を
今ほど心待ちにしている
時代もない

過去も未来も変えられる
今をしっかりと生き抜くことで
過去も未来も違う意味を持つ事ができるから

* * *

何一つあきらめていい事なんてない
どんな小さな事でも もちろんだけど
大きな事ならなおさら あきらめるな

変節漢ほどかっこ悪くて
劣悪で愚かな生きものもない
信用なんてできない

* * *

過去に敷いたレールは
すべて引き剥がされて
今じゃ真新しい道のりができてる

右と左に天使を連れて
純粋な心の君
汚（けが）れのないまま今日を歩いてる

* * *

許せない気持ちを
打ち消せたところで
何一つ得なことなど ありゃしない

あの頃 夢でいっぱいだったはずの胸が
すっからかんになってしまったのなら
僕がもう一度つめこんであげる 夢と希望を

* * *

何も信じられないと泣く
君の顔をもう見たくはないから
その笑顔を さあ 僕に見せてごらん

痛みを知りすぎているからと
それを理由にまだあきらめたりしないで
君には君の道があるから

* * *

今 君の目の前にある苦難という壁
それよりも君は強く偉大だから
何も怖がることはない

厳しき現実の中で
堂々と打ち立てられた夢ほど
気分のいいものはないよね

* * *

聞こえないはずの嫌な言葉が
今なお耳に強く残っていても
君も僕も共に負けずに進もうね

照れて恥ずかしいと思っても
心の中では歌を歌っていてよ
君だけの曲があることも知ってる

* * *

いろんな言葉を並べてきたけど
結局のところ君には ただ
幸せでいてほしいんだ それだけなんだ

夢を持たない世界は灰色
さあこれから色をあげよう
君に夢をあげよう

* * *

現実から逃げたところで
手に入れたものなんか
役に立たない

するどく刺すような痛みが
その胸を襲うのかい？
今はただ君の側にいたい気分なのさ

* * *

物も人も頭で考え思う以上に
復活を遂げるもの
これは最近焼きついた心象風景

命を込めて書くという事が
どういふことなのか
今日初めて知った気がした

* * *

人が人を救うということは
こんなにもこんなにも
熱いものだったのか

いつかの約束の言葉
覚えているのがたとえ僕一人でも
一人きりでも守っていく

* * *

甘い声で囁（ささや）かれても
決して自分の魂を
売り渡したりしないで

はじめの勢いが
はじめだけになってしまっても
また始めればいいんだよ

* * *

君の持つ輝きを
見出してくれるものに
必ず出会うことができるから